〔東京家政大学研究紀要　第 62 集（1），2022，pp. 063 ～ 068〕

投影法を用いたレジリエンス・オリエンテーション・テスト（PRO-Test）の作成にむけた検討

平野　真理[†1]

（令和３年 12 月 4 日査読受理日）

A Study toward Development of the Projected Resilience Orientation Test (PRO-Test)

HIRANO, Mari[†1]

(Accepted for publication 4th December 2021)

要約
本論は，レジリエンスの個人差を理解する新たなツールを得ることを目指し，個人がどのような回復・適応を目指そうとするのか（レジリエンス・オリエンテーション）を読み取る投影法によって得られたデータの量的特徴を検討した．12 場面から構成されるテストについて 1,000 名を対象に行われた調査の回答データ（平野他，2018）から，回答の分布特徴および，自己評価式質問紙との関連が検討され，本手法によって測定されるレジリエンスの個人差が，従来のレジリエンス尺度では測定できていなかった異なる側面を反映できる可能性が示唆された．

Abstract
In this paper, we examined the quantitative characteristics of the data obtained by the projection method, which projected resilience orientation—what kind of recovery or adversity an individual wants to aim—in order to obtain a new tool to understand individual differences in resilience. Based on the response data of a survey conducted on 1,000 subjects for a test consisting of 12 scenes (Hirano et al., 2018), the distribution characteristics of responses and the relationship with self-assessment questionnaires were examined. It was suggested that the individual differences in resilience measured by this method may reflect different aspects that could not be measured by conventional resilience scales.

キーワード：レジリエンス，オリエンテーション，投影法，アセスメント
Key words: resilience, orientation, projective method, assessment

1. 問題と目的

1.1　心理学におけるレジリエンス評価の課題

レジリエンスとは心理的傷つきや落ち込みからの心理的回復や，困難な状況に対する心理的適応を示す概念であり，「困難で脅威的な状況にもかかわらず，うまく適応する能力・過程・結果」[1] と定義される．しかしながらこのレジリエンス概念は，どのような対象にどのような文脈で用いられるのかによって，示すところの意味がやや異なるという特徴がある [2]．近年様々な分野で広がりを見せているレジリエンス研究は，学問としての背景，フィールド，対象のあらゆる面で多岐にわたるため，レジリエンスの定義は上記に挙げた Masten ら [1] のもの以外にも多数存在している．

心理学においてレジリエンスという語が用いられるとき，その主たる関心は，ストレスフルなイベントや逆境に晒されても精神的健康を保つことができる，あるいは一時的に衝撃を受けても速やかに回復することのできる人と，そうでない人との違いを理解することである場合が多い．そうした逆境下での適応力を示す個人を，レジリエンスという能力（あるいは特性）を持つ者として捉え，その特性の構成要素や予測変数を検討しようとする研究が積み重ねられてきた [3]．そして，レジリエンスを予測するパーソナリティ特性（以下，レジリエンス要因と表現する）が明らかにされていくと同時に，レジリエンスを量的に測定する多くのレジリエンス尺度が開発されるようになり [4]，心理学研究において個人のレジリエンスは専らこうした尺度を用いて測定されるようになった．レジリエンス研究には，レジリエンスを個人の能力ではなく状況ごとのプロセスとして質的に理解しようとする研究も多数存在するが [5]，本邦においてはそうした研究は乏しく，尺度を用いた量的研究が圧倒的に多いことが指摘されている [6]．レジリエンス研究に限らず，本邦においてはパーソナリティ研究全体が，尺度開発や尺度研究に偏っていることも指摘されている [7]．

尺度による実証的研究は，レジリエンスの縦断的変化の検討や，臨床的介入前後での変化を明確に示していくこと，また，他の心理特性との関係性を検討していく上で重要であると言える．しかし，そこで用いられる変数が自己評価式質問紙によるものであることの限界には十分に留意すべきである．山口 [8] が指摘するように，本邦におけるパーソナリティ研究は自己評価式質問紙によって測定されるものに偏重しており，本来はより客観的な観察や，他者評価を含めた手法への拡がりが求められる．無論，可能な範囲での測定手段として自己評価式質問紙を用いることは全く問題ではないが，少なくともその質問紙で「レジリエ

†1 東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科

ンス」の何を測定しているのかについて留意した上で研究を展開すべきであると言える．図 1 は，レジリエンス研究の文脈において「レジリエンス」として測定されている個人特徴を整理したものである．多くの自己評価式質問紙で測定されているレジリエンスは，実際には個人が逆境に直面した時の適応力そのものではなく，あくまでもそうしたレジリエンスを予測する内的資質，すなわちレジリエンス要因である（図 1 の(a)）．実際にストレス状況に陥ったときにどの程度適応を保ち，回復できるのかという，本来の意味でのレジリエンスについては，そういった状況下に置かれた際の精神疾患の有無や，心理適応状態の基準によって評価されることになる（図 1 の(b)）．ただしそうした状況を研究のために作り出すことは倫理的に難しく，レジリエンスの個人差に関する研究はもっぱら前者のレジリエンス要因の測定を中心に積み重ねられているが，本来はレジリエンスを予測するパーソナリティだけでなく，実際にストレス状況下に陥った際に個人がどのように回復あるいは適応を示すのかという実際のレジリエンスの部分についても議論していく必要がある．

また，自己評価式質問紙による測定では，自覚されていない要素にアクセスすることができないが，レジリエンスというのは個人の意識的な努力によって生じるもの（e.g. コーピング）だけではなく，非意識的*1 な行動によって生じている場合も多いと言える．例えば，本人が特に重要と捉えていないルーティンワークによって徐々に精神的安定が保たれていったり，他者がうまく手を差し伸べてくれることで知らず知らずのうちに感情調整を行っている場合などもあるだろう．そのため，レジリエンスの個人差をより包括的に理解するには，本人の意識していない側面も拾い上げられるような測定方法の検討が必要であると言えよう．

そして最も重要な課題は，レジリエンスの個人差を測定する上で，現在は尺度得点が数値的に高いか低いかという評価以外の議論がほとんどなされていないということである．上述したように，レジリエンスは環境との相互作用プロセスの中で力動的に発揮される性質を持つものであり，その過程や結果，そして回復のあり方をも包含する概念である．尺度得点の量的個人差だけが議論の対象となることで，個々人がどういった過程で適応し，どういった結果に至ることができるかという，レジリエンスの多様な個人差は見落とされてしまう．本人がストレスイベントに遭遇した際に，「どのように」回復・適応するかについての質的な個人差を評価できるような視座が必要であると言えるだろう（図 1 の(c)）．

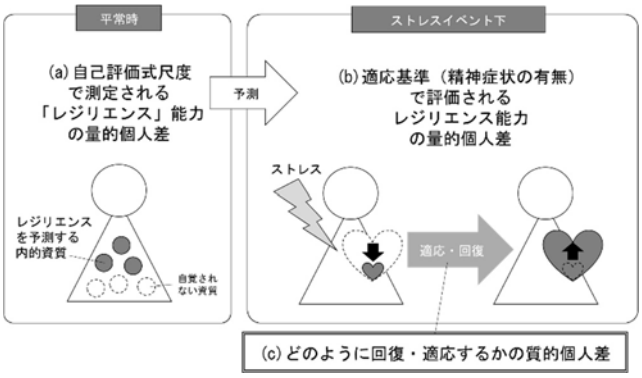

図 1　レジリエンスの評価側面の整理

1.2　レジリエンス・オリエンテーション

そこで平野ら[9] は，投影法を用いて個人の非意識的な側面も含めた新たなレジリエンス理解のツールを得ることを試みた．投影法とは，あいまいな刺激に対する反応を通して個人の非意識的な心理特徴や心理状態を理解しようとするアセスメント方法のことである[10]．自己評価式の質問紙と異なり，社会的な望ましさが働きにくいことや，本人も意識していないような特徴を知ることができる可能性があるという利点をもつ．投影法を用いたテストは多数存在するが，広く研究・臨床現場で用いられてきた心理検査のひとつに P-F スタディ[11] がある．これは，フラストレーション状態にある人物が描かれた図版を見て，その状況に対する登場人物のセリフを想像させるテストであり，回答の分析によって，個人がフラストレーション状態に置かれた際に，反射的にどのような反応を見せるかについての特徴を読み取ることができる．

平野ら[9] は，この P-F スタディで標準化されているフラストレーション場面の開発手順を参考に，レジリエンスが発揮され得る 12 の落ち込み状況場面を設定し，登場人物の反応を答えてもらう形の刺激画を作成した（表 1，図 2）．具体的には，Rosenzweig[12] が P-F スタディの開発にあたって，フラストレーション状況を「どのように満たされないか」（欠乏〔もともとない〕／喪失〔あったものを失った〕／葛藤〔あるがうまくいかない〕）の 3 種類×「満たされない要因」（外部的〔自分以外に原因がある〕／内部的〔自分に原因がある〕）の 2 種類を組み合わせた 6 種類で整理し場面設定を行った手順に倣い，落ち込みをもたらすストレス状況を同様の 6 種類から設定することとした．ただし，ストレス状況の中でも対人場面におけるストレスは特に我が国においては強い影響をもつことが指摘されているため[13]，ストレス状況を一般ストレス場面と対人ストレス場面の 2 場面に分けた上で，それぞれに 6 種類の図版を作成することとした．その後 1,000 名に調査を行い，12 場面の回答（計 12,000 データ）について質的分析を行った結果，投影法を通して個人が「どのような種類のレジリエンス」を「どのような手だてによって」目指すのかという志向性，すなわちレジリエンス・オリエンテーションが反映されることが見出された．具体的には，ストレスのない状態へと向かおうとする【復元】，ストレスフルな状況を受け入れようとする【受容】，ストレス状況の認識や意味づけを変えていこうとする【転換】の 3 種類の志向性と，それらを一人で達成しようとする【一人】，他者を通して達成しようとする【他者】，運や時間など人の力を超越した何かによって達成しようとする【超越】の 3 種類の達成の手立ての，あわせて 9 種類の組合せで整理された（表 2）．これにより，従来のレジリエンス尺度による評価で見落とされていた，「どのように回復・適応するのか」という質的な個人差についても，より豊かに評価することができる可能性が示唆された．

1.3　研究の目的

以上をふまえて本論では，平野ら[9] の調査で収集されたデータを用いてレジリエンス・オリエンテーションの数量的特徴および自己評価式レジリエンス尺度との関連から，オリエンテーションという新たなレジリエンス理解についての妥当性を検討するとともに，レジリエンス・オリエンテーション・テスト（Projected Resilience Orientation Test: PRO-Test）作成に向けた活用枠組みの可能性を検討する．

*1 本人に意識されない行動は「無意識的」な行動と表現されることが多いが，ここでは精神力動論における無意識との混合を避けるため「非意識的」という言葉によって説明している．

表 1　落ち込み場面の設定 [9]

	状況	要因	場面	設定
一般場面	欠乏	外部的	1	お金がなくて先が不安
		内部的	2	努力しても目標や夢に近づけない
	喪失	外部的	3	大事なものを失くしてしまった
		内部的	4	昔できていたことができなくなった
	葛藤	外部的	5	頑張っているのに，周りに評価されない
		内部的	6	やらなきゃと思うけれど，できない
対人場面	欠乏	外部的	7	頼れる人がいない
		内部的	8	言いたいことをうまく伝えられない
	喪失	外部的	9	大切な人と別れてしまった
		内部的	10	信頼を失ってしまった
	葛藤	外部的	11	理不尽に怒られた
		内部的	12	新しい環境に入るのが怖い

図 2　刺激画の例 [9]

表 2　レジリエンス・オリエンテーション [9]

		レジリエンスの手立て		
		一人	他者	超越
オリエンテーションの種類	復元	行動する 手立てを考える	助けてもらう	期待する
	受容	考えない 受け入れる	共感される 否定される	委ねる
	転換	捉え方を変える 方向を変える	相対化される 認められる	報われる

2. 方法

2.1 対象者と手続き

平野ら [9] で用いられたデータを分析対象とした．これは，2014 年 3 月に，インターネット調査会社を通して日本各地に住む 18―30 歳の大学生 500 名，社会人 500 名（男女同数）に行われた調査である．回答はモニター登録者のうち任意の希望者に実施されるため強制されるものではなく，調査会社の倫理ガイドラインに基づき回答内容の安全性や，回答にあたって不利益が生じないよう倫理的配慮が検討された上で実施された．また，研究者には匿名のデータのみが手渡されるため匿名性が保たれていた．対象者の平均年齢は 24.08 歳（$SD = 3.61$）であった．統計的分析は SPSS（ver.24）を用いて行われた．

2.2 調査内容

(1) レジリエンス・オリエンテーション

12 の落ち込み場面の刺激画を順に提示し，「絵の中の人物がどうしたら元気になるか，もしくは，どうしたら楽になるか」についてアドバイスの形で自由記述を求めた．回答は，平野ら [9] の方法に基づき 9 種類のオリエンテーションに基づき分類された．

(2) 自己評価式レジリエンス要因尺度

二次元レジリエンス要因尺度（Bidimensional Resilience Scale: BRS）[14] が用いられた．21 項目から構成され，信頼性と妥当性が確認されている [15] [16]．得点が高いほど，レジリエンスを予測する内的資質が高いことを示す．回答は「まったくあてはまらない（1 点）」から「よくあてはまる（5 点）」までの 5 段階評定で求めた．

3. 結果

3.1 レジリエンス・オリエンテーションの分布および性差

各人が 12 場面を通して用いたオリエンテーションの種類を確認したところ平均 5.20 種類（$SD = 1.13$）のオリエンテーションが用いられていた（表 3）．男性の平均は 5.12 種類（$SD = 1.16$），女性の平均は 5.27 種類であり（$SD = 1.10$），性差はほぼ見られなかった．

3.2 オリエンテーションと自己評価式尺度得点の関連

続いて，各オリエンテーションの出現度数と自己評価式レジリエンス要因尺度得点との関連を検討した（表 4）．自己評価式レジリエンス要因尺度得点の平均値は 65.28 点（$SD = 12.34$），内的一貫性を示すクロンバックの α 係数は.89 であった．

オリエンテーションの 3 つの種類および手立てにおいて，出現度数とレジリエンス要因尺度の相関係数は最も強いもので.14（復元）であり，ほとんど相関は示されなかった．

3.3 図版ごとのオリエンテーションの傾向および一般的反応

次に，図版ごとのオリエンテーションの傾向を確認し，各ストレス状況で一般的にどのような反応が得られやすいのかについて検討した．平野ら [9] に示されている各図版における各オリエンテーションの出現率は表 5 のとおりである．そのうち，3 分の 1 以上の者が同じオリエンテーションを回答した 10 反応を，一般的反応とみなすこととした．全回答者の一般的反応の分布を図 3 に示す．一般的反応の回答率の平均は 45.28%であった．

一般的反応の回答率と自己評価式尺度得点との間に関連があるかを検討するために相関係数を算出したところ，$r = .18$（$p < .001$）であり，ほとんど相関は示されなかった．

3.4 オリエンテーション・タイプ

一人の個人が，全場面を通してどのようなオリエンテーションを用いる傾向があるかを理解する枠組みを得るために，復元・受容・転換の回答率からクラスター分析（Ward 法）を行った．その結果，3 種類をバランスよく用いるバランス型（$n = 319$），復元と転換を用いる復元・転換型（$n = 236$），復元を主に用いる復元型（$n = 272$），転換を主に用いる転換型（$n = 81$），受容を主に用いる受容型（$n = 92$）の 5 タイプが見出された（図 4）．

各タイプで自己記入式尺度得点がどのように異なるかを分散分析および Tukey の多重比較で確認したところ，受容型の尺度得点のみ有意に低いことが示された．ただしその効果量 [17] は小さかった（$F(4,995)=4.38$, $p < .01$, 偏 $\eta^2 = .017$）．

表 3　12 場面を通して用いられたオリエンテーション数

		全体 (N=1,000)	男性 (n=500)	女性 (n=500)
オリエンテーション	1種類	1	1	0
	2種類	7	5	2
	3種類	51	29	22
	4種類	206	119	87
	5種類	345	151	194
	6種類	265	141	124
	7種類	112	48	64
	8種類	13	6	7
	9種類	0	0	0

表 4　オリエンテーションと尺度得点の相関係数

	種類			手だて			オリエンテーション数
	復元	受容	転換	一人	他者	超越	
BRS	.14 **	-.10 **	-.03	-.01	-.05	.10 **	.07 *

** p<.01　* p<.05

表 5　各場面における各オリエンテーションの出現率

			欠乏		喪失		葛藤	
			外部的	内部的	外部的	内部的	外部的	内部的
一般場面			場面1	場面2	場面3	場面4	場面5	場面6
オリエンテーション	一人	復元	44.94% ○	33.90% ○	26.23%	22.72%	9.70%	45.30% ○
		受容	10.81%	20.10%	11.31%	18.32%	5.80%	6.50%
		転換	13.31%	14.50%	26.43%	33.63% ○	23.60%	19.40%
	他者	復元	4.20%	0.70%	1.10%	0.40%	0.70%	1.80%
		受容	2.80%	3.10%	2.10%	5.51%	3.60%	7.60%
		転換	4.00%	13.90%	0.40%	12.21%	10.50%	11.00%
	超越	復元	3.00%	6.40%	27.03%	4.00%	39.30% ○	2.60%
		受容	15.32%	5.50%	3.80%	2.00%	1.20%	4.30%
		転換	0.30%	0.50%	0.30%	0.00%	4.00%	0.00%
	わからない		1.30%	1.40%	1.30%	1.20%	1.60%	1.50%
対人場面			場面7	場面8	場面9	場面10	場面11	場面12
オリエンテーション	一人	復元	22.90%	65.20% ○	7.84%	71.20% ○	12.34%	33.97% ○
		受容	4.70%	3.80%	14.17%	6.30%	48.45% ○	5.71%
		転換	29.10%	9.30%	19.80%	8.30%	6.52%	12.73%
	他者	復元	22.00%	1.80%	0.60%	1.40%	1.10%	2.61%
		受容	2.20%	3.30%	3.62%	2.20%	7.72%	4.31%
		転換	1.90%	4.60%	1.21%	1.20%	13.04%	16.43%
	超越	復元	11.30%	7.70%	37.39% ○	2.30%	1.00%	11.62%
		受容	3.20%	1.90%	11.06%	5.30%	6.52%	11.02%
		転換	0.30%	0.10%	1.91%	0.10%	1.50%	0.20%
	わからない		2.40%	2.30%	2.41%	1.70%	1.81%	1.40%

○：一般的反応

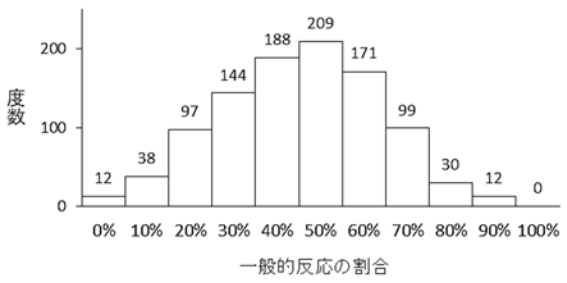

図 3　一般的反応の分布

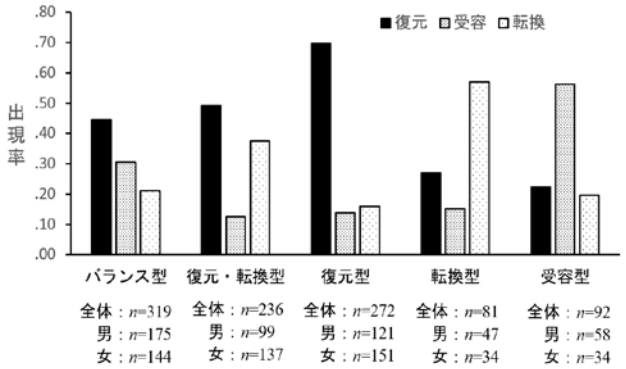

図 4　オリエンテーションの 5 タイプ（クラスター分析）

4. 考察

本論では，レジリエンスの個人差を理解する視座を拡げるために，自己評価式質問紙以外の新たなツールを得ることを目指し，個人がどのような回復・適応を目指そうとするのか（レジリエンス・オリエンテーション）を読み取る投影法テストによって得られたデータの量的特徴を検討した．データの限界はあるものの，レジリエンス・オリエンテーション・テストの今後の発展に向けた基礎的知見を示し，レジリエンスを測定する新たなツールとしての可能性を探ることを目指すものである．

各人が 12 場面を通して行った回答は，それぞれ 9 種類のオリエンテーションに分類されたが，何種類のオリエンテーションを用いていたかの分布はほぼ正規分布を示した．性差については大きな違いは見られなかったが，P-F スタディにおいても性差の影響が顕著であるのは青年期であることが示されており，青年用のみが性差を加味して作成されている[18]．

また，各図版において多くの人が同じように答えやすい回答があるかを確認したところ，12 場面中 10 場面において，3 分の 1 の人が回答していたオリエンテーションがあり，それらを一般的反応と定めた．一般的反応の出現頻度についても，オリエンテーション数と同様に正規分布が示された．こうしたテストにおいて一般的反応をどのような基準で定めるかについて明確な決まりはないが，本邦における P-F スタディの標準化[19]の手順を参考にすると，各場面において，各年齢および男女に共通して最も出現率の高かったものを設定し，平均出現率は約 5 割となっている．今回の調査において設定した一般的反応の平均出現率は 5 割弱であり，おおむね妥当な設定であると考えられる．ただし，一谷ら[20]も指摘するように，発達過程で反応傾向は変化していく可能性が高いことから，今後対象年齢を拡げた際には今回とは異なる反応傾向が見られる可能性があるため，その際には改めて検討する必要があるといえる．

続いて，自己評価式質問紙との関連である．9 種類のオリエンテーションとの相関を検討したところ，いずれも相関係数は.20 未満でありほとんど関連が示されなかった．加えて，一般的反応の多さと自己評価式質問紙との関連についてもほとんど相関が示されなかった．すなわち，本手法で測定されたレジリエンス・オリエンテーションは，従来のレジリエンス尺度で測定されている側面とは異なると考えられる．図 1 に示したように，自己評価式尺度に反映されるのは，レジリエンスを予測する内的資質のうち自覚されたものである．そして，今回の手法によって反映されたのは，実際のストレス場面で「どのように」回復・適応するかについての個人特徴である．レジリエンスの自己評価式尺度の得点は，「どの程度」回復・適応するかを予測することが前提となっているわけであるが，「どのように」回復・適応するかとは関連が弱いことが明らかとなった．したがって本手法は，従来のようにレジリエンスが高いか低いかという一義的な評価だけではなく，レジリエンスの新たな個人差を捉える視点をもたらすと言える．そしてそれは，レジリエンスを高めるアプローチを考えていく上で，単純に一方向の働きかけを行うのではなく，個々人のレジリエンスを個々人の特徴に合わせた形でより効果的に発揮させる教育や介入の可能性を拡げるヒントを与えるものとなると考える．

最後に，クラスター分析の結果 5 つのオリエンテーション・タイプが抽出された．復元，受容，転換のそれぞれのオリエンテーションを中心に用いるタイプと，3 種類のオリエンテーションをバランスよく用いるタイプ，そして，復元と転換を合わせて用いるタイプが見出された．最後のタイプは，言い換えれば受容を用いないタイプであるともいえる．タイプ間における自己評価式質問紙得点の比較においては，受容型のみ他のタイプと比較して得点が低いことが示されたが，その他のタイプ間の違いについては特に見出だすことができなかった．今回は，適応に関する指標となるデータを取得していないため，これらの 5 つのタイプがどのように異なる適応特徴を有しているのかなどについては検討することができなかった．今後の調査を通してこれらのタイプの特徴を明らかにしていき，本テストの結果をオリエンテーション・タイプとして理解していくことができれば，レジリエンス・オリエンテーション・テストは教育・臨床的により有用なツールとなる可能性がある．

また本研究は，自己評価式質問紙と投影法で測定された個人のレジリエンスの比較から，両測定方法によって異なる側面が測定され得ることが示されたものの，外的な基準を設けることはできていないため，両者のどちらがレジリエンスのプロセスや結果をより適切に測定しているのかといった判断はできない．これは本研究に限らず，非常に主観的なものである「心理的傷つき」の状況を統制したり，逆境状況を実験的に生み出すことの倫理的難しさというレジリエンス研究全般に関わる課題でもあるが，そうした限界の中でも可能な妥当性の検討方法を模索し，レジリエンス・オリエンテーション・テストの適用性を検討していくことが求められる．

引用文献

1) Masten, A. S., Best, K. M. & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. Development and Psychopathology, 2, 425-444.
2) Fletcher, D. & Sarkar, M. (2013). Psychological resilience. European Psychologist, 18, 12-23.
3) Grotberg, E. H. (2003). What is resilience? How do you promote it? How do you use it? In E. H. Grotberg (Ed.), Resilience for today: Gaining strength from adversity (pp.1-30). Westport, CT: Praeger Publishers.
4) Windle, G., Bennett, K. M., & Noyes, J. (2011). A methodological review of resilience measurement scales. Health and Quality of Life Outcomes, 9, 1-18.
5) Cicchetti, D. & Lynch, M. (1993). An ecological-transactional analysis of children and contexts: The longitudinal interplay among child maltreatment, community violence, and children's symptomatology. Development and Psychopathology, 10, 235-257.
6) 村木 良孝 (2016). レジリエンスの統合的理解に向けて――概念的定義と保護因子に着目して―― 東京大学大学院教育学研究科紀要，55，281-289.
7) 榎本 博明 (2013). 人格心理学領域における研究動向――その現状と課題―― 教育心理学年報, 52, 34-45.
8) 山口 陽弘 (2011). 心理尺度に着目したこの一年の概観――パーソナリティ研究とは「心理尺度づくり」なのだろうか？―― 教育心理学年報 50, 97-107.
9) 平野 真理・綾城初穂・能登眸・今泉加奈江 (2018). 投影法から見るレジリエンスの多様性――回復への志向性という観点―― 質的心理学研究, 17, 43-64.
10) Tuber, S. (2012). Understanding Personality through Projective Testing. Lanham: Jason Aronson, Inc.
11) Rosenzweig, S. (1978) The Rosenzweig Picture-Frustration (P-F) Study: Basic manual. St. Louis: Rana House.
12) Rosenzweig, S. (1938). A general outline of frustration. Personality, 7, 151-160.
13) 橋本 剛 (2003) ．対人ストレスの定義と種類――レビューと仮説生成的研究による再検討―― 静岡大学人文論集，54，21-57.
14) 平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み――二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成―― パーソナリティ研究, 19, 94-106.

15) 平野 真理 (2011). 中高生における二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の妥当性――双生児法を用いて―― パーソナリティ研究, 20, 50-52.
16) 平野 真理 (2012). 二次元レジリエンス要因の安定性およびライフイベントとの関係 パーソナリティ研究, 21, 94-97.
17) 水本 篤・竹内 理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために―基礎的概念と注意点―.英語教育研究, 31: 57-66.
18) 一谷 彊・林 勝造・中田 義朗・秦 一士・津田 浩一・西尾 博・西川 溝 (1985a). P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅰ）序論 京都教育大学紀要 A 人文・社会 66, 1-10.
19) 一谷 彊・林 勝造・中田 義朗・秦 一士・津田 浩一・西尾 博・西川 溝 (1985b). P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅱ）予備的研究 京都教育大学紀要 A 人文・社会, 67, 31-49.
20) 一谷 彊・林 勝造・中田 義朗・秦 一士・津田 浩一・西尾 博・西川 溝 (1986). P-F Study（青年用）標準化の研究（Ⅲ）標準化のために―中学生・高校生・大学生について 京都教育大学紀要 A 人文・社会, 68, 1-24.

付記

本研究は JSPS 科研費 18K13330 の助成を受けたものである．本論文の結果の一部は，日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会で発表された．